みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Mexican Americans : Resistance and Creativity

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-01-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒田, 悦子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000791

[第二章]◆セサル・チャベスの農業労働組合運動を支えたチカノ文化

メキシコ系アメリカ人は多種多様である。歴史的には、十六世紀以来の家系を語る人もいれば、移民して間もない人もいる。階層的にも、上層、中産階級、アンダークラスと様々である。地理的には、南西部に集中しているとはいえ、一九六〇年代以降は中西部、北部の都市など各地に広まり、近年では白人とモルモン教徒からなる住民の均質性で知られていたソルト・レイク・シティにまで進出していると報じられている[*USA Today*, Oct. 9, 1998]。このように、メキシコ系の人々は千差万別なのであるが、南西部とくにカリフォルニアの農業労働者としてのメキシコ系の人々の存在は大きく、アメリカ人一般にとっても無視しえない。

カリフォルニア州には大農場が数多く、そこでの労働力の主力をなすのがメキシコ系の人々であり、この人たちによる労働組合運動には長い歴史がある[Galarza 1977]。そのなかで、ひときわ注目を惹くのは一九六〇年代からセサル・チャベスが率いた農業労働組合運動である。この組合活動は現在も引き継がれており、六〇—七〇年代のチャベスの運動は現在もメキシコ系の人々の間で輝かしい「公的記憶」[ボドナー 1997: 66–129]として生き続けている。

彼の指導した運動を同時代のメキシコ系のリーダーによる政治運動、いわゆるチカノの運動（第一章参照）に比べてみると、その重要性が見えてくる。コロラド州デンヴァーを中心に活躍したコーキー・ゴンサレスは若きプロ・

ボクサーとしてさっそうと登場し、詩をよみ青年の文化的目覚めを呼びかけたが、民主党による取り込みにあい、彼の運動は長続きしなかった。ニューメキシコ州で活動したライエス・ロペス・ティヘリナは土地返還運動を展開し争点を一八四八年のグアダルーペ・イダルゴ条約に求めたものの、現実的に運動を展開できず、暴力事件を誘発してしまった。テキサス州クリスタル・シティを中心に活動したホセ・アンヘル・グティエレスは教育界、政界にメキシコ系の代表を送るべく努力したが、必ずしも成功せず、統一民族党（ラ・ラッサ・ウニーダ）の設立に向かった。この三人のリーダーに比べて、セサル・チャベスの運動は国民的レベルでの成果を納めたといえる。

その理由は、彼が運動の様々な時点で語っているように、民族（raza）ではなく、大義や主義（causa）のために闘おうと努力したからである。つまりメキシコ系の人々のためだけではなく、民族区分をこえて農業労働者を組織し組合活動を展開して、生活の向上をはかったからであった［Chávez 1974b: 360–365］。このために、彼はアメリカ合衆国の各種労働組合との連繋、コミュニティ活動、市民運動、教会、学生組織、政治家、民族リーダーの協力を活用し、アメリカ社会の脈絡の中で現実的に運動を展開した。この手法は、後述するように、セサル・チャベスがその人生のなかで徐々に学びとったものである。しかしながら、この彼の運動にメキシコ系の農業労働者を誘い込み、そのエネルギーを効果的に発露させるためには、この人々にとって意味深いスペイン語の語り口、儀礼、儀礼上の時（タイミング）、宗教的文化的表象、音楽、詩、劇、視覚的メディア（たとえば壁画）などが活用されたことも事実である。チャベスや彼の支持者が意図的にそれらを使った場合もあるが［中川 1992: 137–140］、運動に参加する人々の間から自然に出てきた場合もある。このような相互作用の過程に、メキシコ文化とは一味異なったメキシコ系アメリカ人の文化、人によってはチカノ（政治的に目覚めたメキシコ系アメリカ人）文化とよぶものが徐々に構築されていった。つまりは、チャベスの農業労働組合運動がチカノ文化構築の一つの場とも時ともなったのである。そのため、彼の運動は単なる労働組合運動ではなく文化運動としても注目に値する。

そこで、本章では、第一節でセサル・チャベスの生涯を辿りながら、その運動の現実的展開を紹介していく。ついで第二節では、政治的な組合活動を支えた文化的側面を指摘し、メキシコならぬメキシコ系アメリカ人の文化的構築について解説していきたい。そして最後の第三節では、チャベスの遺産を引き継いだ農業労働組合運動の現状に言及することにする。

一．セサル・チャベスの生涯と農業労働組合運動の展開

彼の生涯とその運動については、運動がピークをむかえた七〇年代と一九九三年四月の彼の没後に出版物が多くでている。そのなかで、情報量が多く記述に均質性のある文献数点［Chávez 1993, 中川 1992, 1993, 1994, Rodriguez 1991, Taylor 1975, Young 1972］を中心にして年代順にチャベスの活動を総括し、必要に応じて他文献で補充し、注釈のいる折には注で補充した。

セサル・チャベスは一九二七年にアリゾナ州ユマ（地図1）に生まれた。ユマはアリゾナ州とカリフォルニア州とメキシコ領バーハ・カリフォルニア州の接する地点の近くにある。父方の祖父はメキシコ革命時にアメリカ合衆国に移住したので、セサルの父はアメリカ生まれのアメリカ市民であり、一六〇エーカーの自作農場を与えられた入植者であった。

一九二九年に大恐慌がはじまると、一家の生活に変化が起こった。一九三九年頃、父は農地を失い、家族は五人の子供を連れて移動労働者となった。アリゾナ→南カリフォルニア→セントラル・ヴァレー→南カリフォルニアのルートを追って移動した。このため、セサルは三〇回の転校をよぎなくされ、小学校七級目で学校教育を終えた。そして、セサルの父は労働組合活動に参加しはじめた。

地図１　チャベスと組合活動に関わりの深いカリフォルニア州の地名（Rodriguez 1991: 50 より作成）

一九四四年、一七歳でセサルは海軍に入隊し、二年間太平洋で勤務した。帰国して、一九四六年には全国農業労働者組合（National Agricultural Worker's Union）に入り、組合運動を経験した。

一九四八年、デラーノ（Delano 以下、地名と人名をスペイン語表記する。英語表記の定着した地名はそれを採用）でヘレン・ファベラと結婚し、サンノゼに移り、弟リチャードと共にメキシコ系の人々の多い居住区サル・シ・プエデス（Sal si Puedes できるならでて行け、の意）に住む。アンズ、スモモの果樹園で働く。

一九五〇年、息子、続いて娘が誕生し、生活のためリチャードと共にカリフォルニア州北部に向か

セサル・チャベスとUFWの旗、サンフランシスコ、ミッション・ディストリクトの壁画、1998年撮影

い、オレゴン州との境を流れるスミス河近くの木材キャンプで働く。しかし、同年サンノゼに戻り、ドナルド・マクドネル司祭とつき合いはじめる。マクドネル司祭は貧困者のためのカトリック組織であるスペイン宣教団（The Spanish Mission Band）の成員で、福祉と農業労働組合運動に興味を抱いていたので、チャベスに近寄ったのであった。宣教団の解体後[1]も、マクドネル、T・マッカラウ司祭はチャベスやその友人ドロレス・ウェルタに協力し、一九五九年には後述する農業労働者組織委員会（AWOC）の設立に協力した［中川 1993: 42］。

スペイン宣教団の関わりをのべたので、ここでチャベスを支援した宗教組織についてまとめてのべておこう。プロテスタントのカリフォルニア移動牧師団（California Migrant Ministry）のウェイン・ハートマイヤー、ジム・ドレイクなどの牧師も一九六二―六五年にチャベスの労働組合活動の開始にあたって援助を与えた［中川 1993: 39, 43-44］。そして、プロテスタントでも長老派、メソディストは支

持を与えたが、デラーノ（チャベスのストの拠点地）のバプティスト教会の主任牧師はストに否定的であった［中川 1994: 325, 327］。

カトリック教会は最初は協力せず、司祭の個人協力にとどまったが、一九六五年一二月には全国レベルの組織でスト支持を表明する司祭が増え、一九六七年秋にはデラーノにマーク・デイ司祭が送りこまれた［中川 1993: 38］。

右の事実から分かるように、プロテスタントであれカトリックであれ、援助と協力を与えてくれる組織や個人とチャベスは活動を共にした。宗派にとらわれず、実質的援助を大切にしたのであった。しかし、彼は自分やメキシコ系の人々に関わりの大きいカトリック教会に対して一定の見解をもっていた。あるインタヴューで、チャベスは、カトリック教会は強力な組織であり、社会の変革、社会正義、兄弟愛のために活動すべきだ、と語っている［Chávez 1974a: 144–145, 1974b: 363］。

なお、ここでユダヤ教との関わりについても言及しておこう。一九六五年一二月にユダヤ教関係者はカトリック、プロテスタント関係者と共にデラーノを訪ね、ストの実情を調査し、一九六六年一月には改革ラビ西部連合代表者会議でストの支持を決議し、全米に寄付を求めた。そして、同年三―四月の組合員の州都サクラメントへの行進にはダビデの星を掲げて参加した［中川 1993: 37, 45, 1994: 320］。

さて、話を一九五二年に戻して、チャベスの行動を追うことにする。

一九五二年、マクドネル司祭を通じてチャベスはコミュニティ・サーヴィス組織（CSO）のフレッド・ロス（Fred Ross）に会い、これから一〇年間はCSOの影響下に生きることとなる。CSOとは一九四七年にロサンゼルスのメキシコ系のビジネスマン、組合員、労働者、退役軍人により構成され、エドワード・R・ロイバル（一九四九年に最初の市議会員となる）に指導されていた。この組織の初期の戦術はメキシコ系人口の政治参加を実現するための選挙人登録の推進にあった。この目的のため、同組織はシカゴを中心に活動した社会事業家ポール・アリ

ンスキー[2]が設立した産業地域財団（Industrial Areas Foundation, IAF）の資金をえて、フレッド・ロスの協力を求めることとなり、イースト・ロサンゼルスで仕事をはじめた［Gómez-Quiñones 1990: 53-56］。ロスは大恐慌時代のニューディール政策下、カリフォルニアのアーヴィンで農業部門の救済にたずさわったり、第二次世界大戦後はクリーヴランドの戦時転住局の事務所で強制移住させられた日系人のために働いた経験のある人で、一九四七年にアリンスキーに雇われ、CSOで活動することとなった。彼は活動の効果を上げるためメキシコ系の人々の協力を必要とし、マクドネル司祭の紹介で、サンノゼのサル・シ・プエデス居住区を何回も訪れ、一九五三年にチャベスをCSOに加わるよう説得した。チャベスは主に選挙人登録と市民学級の実現に努力することとなった［Reitzes and Reitzes 1987: 202-206, Rodriguez 1991: 37］。

一九五七年、チャベスはフレッド・ロスの友人でCSOのロサンゼルス本部で活躍していたドロレス・ウェルタと知りあい、終生の共闘仲間をえることになった。一九五八年、チャベスはCSOのロサンゼルス本部長となった。

一九五九年、アメリカ労働総同盟—産業別労働組合会議（American Federation of Labor-Congress of Industrial Organizations, AFL—CIO）から農業労働者組織委員会（Agricultural Workers Organizing Committee, AWOC）が分離し、フィリピン系の労働者がこれに参加した［Petrone 1972: 75］。

一九六二年三月、南カリフォルニアのカレシコにてCSOの大会が開かれ、ここでチャベスは農業労働者の組織化を活動目的として提出したが、否決された。そこで、同月末、彼はCSOを去り、デラーノ[3]に向かい、農業労働者の組織化をはじめた。カリフォルニア移動牧師団のジム・ドレイク牧師が協力を約束した。チャベス三五歳のことであった。これ以降の六〇—七〇年代は労働組合活動の最盛期となる。

一九六二年九月、フレズノにて全国農業労働者連合（National Farm Workers' Association, NFWA）を創立する。組織の紋章はアステカの黒い鷲と決められた。

一九六四年、ＮＦＷＡの成員は一〇〇〇人となった。組合紙 *El Malcriado* の刊行がはじまる。チャベスのＣＳＯ時代の友人ドロレス・ウェルタが運動に参加した。同年、ジム・ドレイク牧師がトゥラーレ郡の州立農業労働キャンプの改善に乗りだす。チャベスはこれを援助した。

一九六五年九月、コアチェリャのブドウ農場で働くフィリピン系労働者がストを打ったが、スト破りは非組合員のメキシコ人であった。そこでＡＷＯＣのリーダーであったフィリピン人ラリー・イトリオング（Larry Itliong）はチャベスに協力を依頼してきた。移動牧師団も支援し、二つの民族集団の共闘がはじまった。

同年、シェンレイ産業を相手にブドウ・ストライキがはじまった。シェンレイや後述のディジョルジョは有名ブランドの食品を販売する巨大ビジネスであり、ブドウ生産は収入の一部にすぎなかった。それにもかかわらず、なぜ、ブドウ生産がストライキの対象になったかというと、ブドウの生育には一〇か月もかかるので労働者の移動性が少なく、組織化が容易であったからである［Rodriguez 1991: 58, 71］。

このストに対して各種組織の援助がはじまった。ここで、このストに限らず、援助の構図はいかなるものか、図式化してみよう。

ＮＦＷＡ、ＡＷＯＣを援助するのはまず、アメリカの他の労働組合であった。統一自動車労働者組合（United Auto Workers Union, ＵＡＷＵ）、船員国際組合（Seafares International Union, ＳＩＵ）、国際港湾労働者・倉庫係組合（International Longshoremen's and Warehousemen's Union, ＩＬＷＵ）、精肉包装出荷工場労働者組合（Packing House Workers Union）などである。ヨーロッパの港湾労働組合員も協力した［Rodriguez 1991: 21, 62, 64, 78, Petrone 1972: 145］。これに対して、ティームスターズ・ユニオン（Teamsters, 正式名 The International Brotherhood of Teamsters, Chauffeurs, Warehousemen of Helpers of America）は農場主に雇われて、スト破りをした。

組合に次いでストを支えたのは市民の不買運動である。ブドウ・ストライキへの支援を求めてチャベスが組合員を全国に派遣したところ、一九六五年に全国一三都市でボイコットが成立した。ニューヨークでは運送労働者組合（TWU）やアメリカ消費者連合会（CFA）、ラルフ・ネイダーの協力があった。一九六六年、シカゴ、ピッツバーグでは不買運動にカトリック教会、プロテスタント諸派が協力した。オクラホマ・シティではカトリックの大司教の援助があった。テキサス州ではカトリック教会が支援した。そして、一九六六年四月二日にはボストンでボストン・グレープ・パーティ（ボストン・ティー・パーティーをもじった名称）が開かれ、二〇〇人が港まで行進し、ブドウを海に捨てた［中川 1994: 321-326, Petrone 1972: 130］。デトロイトやクリーヴランドでも不買運動は成功した。同様の市民からの援助は一九六八年、農場での農薬使用による薬害に抗議するためのブドウ不買運動にも与えられた［Petrone 1972: 140-141］。

次に援助を与えた組織は学生組織である。学生非暴力調整委員会（Student Non-Violent Coordinating Committee, SNCC）と人種平等会議（Congress of Racial Equality, CORE）である。チャベスはカリフォルニア大学バークレー校に出向き、演説し、支援をえた［Kushner 1975: 118-129］。

また、政治家、民族リーダーもチャベスに援助を与えた。ロバート・ケネディ、マーティン・ルーサー・キング、ジェシー・ジャクソンがチャベスを支援し、組合の記念的集会に参加した［中川 1992, Rodriguez 1991］。また、あまり言及されないことではあるが、マーシャル・ガンズ（Marshall Ganz ユダヤ教のラビの息子。ハーバード大学卒業後、ミシシッピー州のマコンベ郡で公民権運動に従事）も一九六五年頃、チャベスの運動に合流した［Altman 1996: 60］。

さて、話を一九六五年に戻す。この一二月一六日にマーティン・ルーサー・キングがデラーノを訪問し、クリスマス・メッセージを読んだ。

一九六六年三月、対シェンレイ産業へのブドウ・ストライキの支援を表明するためチャベスと組合員と支援者は、デラーノから州都サクラメントへと行進を行ない、復活祭の日曜日に到着した。この三月から四月に、ルイス・バルデス率いる農民劇団が活躍し、ストと行進への参加者に活気を与えた。

まもなく、デラーノのディジョルジョ家のシエラ・ビスタ農場でブドウ・ストライキが起こった。この家族はシシリア出身で［Petrone 1972: 61］、自力で財を成してきており、ストへの対応も実力主義で、ティームスターズ・ユニオンに依頼しテキサス州やメキシコから労働者を動員して、スト破りに使った。これに対抗するため、ＡＷＯＣとＮＦＷＡは合併し、統一農業労働者組織委員会（United Farm Workers Organizing Committee, ＵＦＷＯＣ）となった。指導者はチャベスであった。ＡＷＯＣに所属していたフィリピン系労働者は食卓用ブドウの生育と収穫のために雇われてきたので、ワイン用ブドウに関わってきたメキシコ系の人々より高賃金をえてきており、新組合ではマイナス面も多かったが[4]、移籍したのであった［Rodriguez 1991: 73–77］。

この後、チャベスはユージン・ネルソンをテキサス州に派遣して組合を組織させ、翌一九六七年にはストを起こした。

一九六七年、ジュマッラ、ディスポトス、コバセヴィチェス家の農場でブドウ・ストライキがはじまった。ジュマッラはシシリア出身、後の二者は東欧出身の農場主であった。ジュマッラは食卓用ブドウでは最大の生産者で、不買運動に対しては、州法に反してまでも販売用のラベルをつけかえて売ろうとした［Petrone 1972: 109, 152, Rodriguez 1991: 77–79］。

秋にはカリフォルニア産ブドウのボイコットが全米に広がった。ＵＦＷＯＣの活動は好調で、デラーノに組合のセンターとなるフォーティ・エイカーズ（Forty Acres）建設をはじめた。ここには雇用事務所、診療所、事務所、ガス・ステーション、六〇室の老人ホームがつくられた[5]。この頃、ロバート・ケネディ、マーティン・ルーサー・

キングの訪問があり、AFL—CIO、UAWU、カトリック、プロテスタントの支援が増えた。

一九六八年、チャベスは平和的活動を訴えて、デラーノの公園で二五日間の断食をした。最終日の三月一〇日、ミサをとり行ない、ロバート・ケネディが参加した。

一九六九年、UFW（今やOCの字は削除された）はアリゾナ州で活動を開始した。同年六月、フィリピン系労働者は別行動をとりはじめた。ラリー・イトリオングがUFWから離れた年月は不明であるが、彼はチャベスと別れ、反対派のティームスターズ・ユニオンに与した。また一九七七年にはチャベスや、ドロレス・ウェルタと組んで第二副代表を一二年間つとめたフィリピン系のフィリップ・ベラ・クルスがUFWから去って、フィリピン系とメキシコ系の連繋が終わった［Scharlin & Villanueva 1994: 66–128］。リーダーシップや政策上の争いもあったが、文化的差も民族共闘を短命に終わらせる原因となった。

一九七〇年、ブドウ・ストライキは終了した。これ以降、チャベスとその組合活動は他の生産物をめぐるストと他州での労働者の生活改善へ向かった。

一九七〇—七一年、サリーナス・ヴァレーでレタス・ストライキがはじまった。ブドウと異なり、レタス農場は大型の食品企業に所有されており、企業はティームスターズを雇って対抗したが、UFWは闘いをかちとった。

一九七二年、UFWは労働者の収入を二倍にし、保険も支給できるようになっていた。またカリフォルニア州での農業労働者の組合活動を禁止した住民提案二二の廃止に成功した。同年、チャベスはアリゾナ州フェニックスで二四日の断食を行ない、同州の農業労働法（反組合組織法）に反対を表明した。

一九七三—七五年、農場主と組んだティームスターズへのUFWの対抗が続いた。

一九七三年、UFWはフロリダ州の農業労働法に反対を表明した。

一九七四—七五年、UFWがアリゾナ州のユマで柑橘類栽培農場主に対してストを行なった。七五年、同州のトゥ

ソンで農業生産物を扱う一連の商人に対してストを行なった。

一九七七年、ＵＦＷの下部組織がカリフォルニア州のマリポサで玉ネギ・ストを行なった。

一九七八年、ＵＦＷがアリゾナ州の農業雇用関係条例（Agricultural Employment Relations Act）を違法と連邦裁判所で認めさせた。同年、ＵＦＷに繋がる組織がフロリダ州でトマト・ストを行なった。

一九七九年、ＵＦＷは、インペリアル・ヴァレーでレタス・ストを実行。同年から八二年まで、各地で野菜スト、ニンニク・スト、柑橘類ストが続く。

一九八二年、ＵＦＷ二〇周年記念。

一九八四―八六年、労働契約の改善と薬害に反対するためブドウ・ストが再びはじまる。一九八八年、薬害への抗議のため、デラーノの組合センターのフォーティ・エイカーズでチャベスが三五日の断食。断食明けの七月一七日のミサに、黒人指導者ジェシー・ジャクソン、ロバート・ケネディの未亡人エセル・ケネディが参加した。

一九八九年、カリフォルニア州ストックトンでトマト・スト。

一九九〇年に入って、チャベスはブドウ畑での薬害への抗議に尽力していたが、一九九三年四月二二日、生地アリゾナ州ユマで死去した。

二、運動を支えたチカノ文化

第一節でみたように、セサル・チャベスは組合活動を進めるにあたってアメリカ合衆国の組織体を的確に使い分け、与えられる人脈を活用していった。ブドウ・ストライキに代表されるように標的とする農産物と農場主を心得ていたし、ＣＳＯからは草の根レベルの人々を組織する手法を学び、様々な組合組織の支援をとりつけ、市民の不

買運動に連繋ブレーを求め、宗派の異なる宗教組織や学生組織からの援助をえたうえ、民主党の大物政治家や民族リーダーの支援をとりつけた。極めて現実的にアメリカ合衆国の市民社会のルールにのっとって運動を展開したといえよう。しかし、これは運動の組織面や政治面、チャベスの言葉でいうとカウサ（causa 大義、運動、主張）を検討したときにいえることであり、運動の過程の詳細を追って文献を一つ一つ読みかえしてみると、運動を支え盛り立てていく諸局面に、色濃くメキシコ系文化が生かされていることに気がつく。大義の実現のためにラッサ（raza 民族）の文化が活用されているのである。

組合員の大多数はメキシコ系の人々であった。運動の最盛期に成員数は八―一〇万にものぼったらしいが、どの年代においても大多数はメキシコ系で、フィリピン系、黒人、白人、ヒンドゥー教徒、アラブ人、日系人が混じっていた［Chávez 1993: 19-22］。リーダーがメキシコ系で、大多数の組合員がメキシコ系であるときに、メキシコ的スペイン語表現、メキシコ文化に由来する表象、儀礼、音楽、詩、劇、壁画などが運動を盛り立てていくために採用されるのは自然の流れであろう。しかも、ここで注目すべきは傍点で示したように、「メキシコ文化に由来する」文化要素が活用されつつ運動が展開する過程で、メキシコ文化とは一味違った「メキシコ系アメリカ人のエスニックな」文化活動、人によってはチカノ文化と呼ぶものが芽生えたことである。この点に留意しながら、チャベスの運動の過程で浮上した七つの文化要素をとりあげ解説を付けていきたい。

(1)スペイン語表現

組合のフィリピン系成員が指摘しているように、メキシコ系成員のスペイン語の会話が英語しか話さない成員とのコミュニケーションをさまたげたという事実がある［Scharlin & Villanueva 1994: 92］。しかし、このことは逆にメキシコ系の人々の間でのスペイン語による理解の容易さを語るものでもある。スペイン語といっても、農業労

働者の使うものは、かなり独特のものであり、[6] 理解するだけでも難しい。用語に特殊なものがあり、英語も混じり、音調としてもメキシコ語とは異なる。つまりはメキシコ系アメリカ人のスペイン語であり、その特性をのべるだけで一論文が必要であろう。ここで指摘しておきたいことは、メキシコ系農業労働者のチャルラ（charla おしゃべり）、プラティカ（platica 会話）、ディアロゴ（diálogo 対話）が独特のコミュニケーション世界をつくり、組合労働者のコミュニケーションを容易にし連帯感を高めるのに役立ったであろう、ということである。

(2) 非暴力を訴える断食明けのミサ

チャベスの運動にみられる非暴力の精神は一般にはガンジーの生涯から学んだものとされているが、マクドネル牧師から与えられた聖フランシスコの生涯を語った本から会得したとも言われている［Altman 1996: 17］。しかし、この非暴力の精神はチャベスが母から教えられたものでもある。母親は無学であったが、彼自身の発言によると、ディーチョス（dichos ことわざ）をまじえながらコンセーホ（consejo 助言）を与え、力で闘うことがいかに無益かを息子に教えたという［Chávez 1974b: 364］。

こうして体得した非暴力の精神を運動の一つの原則とするチャベスは自らが断食することで組合員が暴力に走るのに歯止めをかけ、断食明けのミサに組合員を誘い込み、参加者の団結を訴えた。

ミサにまでは至らないが、祭壇を前にして祈るという行為は組合活動の過程に自然発生的に出現した。一九六六年、ディジョルジョ家のシエラ・ビスタ農場に対するブドウ・ストライキの際、ピケを張っていた農場の門の前で、三人の女性の提案によりワゴン車の荷台に祭壇がつくられ、寝ずの番のなか、組合員たちが祈りを捧げるという事が起こった［Dunne 1967: 写真部分, Rodriguez 1991: 75］。そのうち、祈りのみならず、ミサが断食明けに行なわれ、大勢の組合員と国家レベルの要人の参加が計画されるようになった。それは次の三例にみられる。

一九六八年、ジュマッラ家の農場に対するブドウ・ストライキの折、チャベス（当時四一歳）はデラーノの公園で二五日間の断食を行ない、組合員はトラックの荷台に祭壇をつくり毎夜ミサに参加した。断食の明ける三月一〇日、カトリックの司祭、プロテスタントの牧師、ユダヤ教のラビの参加するミサが行なわれ、ロバート・ケネディも参加した［中川 1993: 37, Rodriguez 1991: 15–18］。

一九七二年五月、アリゾナ州の州知事ジャック・ウィリアムズ（共和党）が反組合法に署名したのに対して、チャベス（当時四五歳）はフェニックス市のメキシコ系の居住区で二四日間の断食を行なった。この折のミサについては詳細は分からないが、この断食の社会的影響は大きく、一九七四年にはアリゾナ州の州知事にメキシコ系のラウル・カストロが選出された［Rodriguez 1991: 94］。

最後の断食は一九八八年、デラーノのフォーティ・エイカーズで農業薬害に抗議してチャベス（当時六一歳）が三六日間の断食を行なった。断食の明ける七月一七日にはミサが行なわれ、ロバート・ケネディの未亡人エセル・ケネディ、ジェシー・ジャクソンが参加した［Rodriguez 1991: 102］。

このような断食明けのミサは一大イヴェントとなり、参加する組合員が非暴力を訴えるチャベスの姿勢をよりよく理解する機会となったし、国民的政治家をデラーノとその周辺に誘いだすことにより、カリフォルニアの農業労働組合運動は国民的な注目を集めることができた。

(3)カトリックの表象と儀礼上の時

メキシコの国民的宗教シンボルであるグアダルーペの聖母の図像、十字架上のイエス像、そして四旬節—聖週間の儀礼の時は運動の高揚のために活用されている。

グアダルーペの図像はすでに一九五九年、CSOに所属した時代のチャベスがオクスナードで組織した抗議行進

に使われた。この時、農業雇用サーヴィス（Farm Placement Service）の事務所が低賃金のメキシコ人人夫（ブラセロ）を優先し、アメリカ合衆国に住みついたメキシコ系の人々に仕事を与えないことにＣＳＯは何回も抗議していた。最大の抗議行進には約一万人の参加があり、グアダルーペの図像を描いた幟を掲げて行進し、メキシコ国歌を歌った［Rodriguez 1991: 45］。その後、一九六六年のブドウ・ストライキの行進の先頭にも合衆国旗と並んでグアダルーペの幟が立てられた［Conord 1992: 6の写真］。同年のサクラメントへの行進にもグアダルーペの幟は使われた［Altman 1996: 68と72の写真］。その他にも、様々な行進にこの宗教シンボルは伴われ、組合事務室にも飾られた［Altman 1996: 90の写真］。

十字架上のイエス像は一九六六年夏、ディジョルジョ家の農場へのブドウ・ストライキの時、ＮＦＷＡの旗（後述）と並べて組合員によって運びだされた［Altman 1996: 78の写真］。人気がなかったのか、以降この像が使われたとの記述に出会わない。希望と救いのグアダルーペの幟は好まれ、受難を体現する十字架上のイエス像は敬遠されたというのも一つの理解であるが、前者は運びやすく後者は運びにくいから使用されなかったともいえる。

カトリックの儀礼の時も運動の盛り上がりのために活用されている。一九六六年三月のサクラメントへの行進は「復活の日曜日」に到着するよう計画されている。この行進は巡礼と呼ばれ、キリストの受難の物語を再現する四旬節と聖週間の儀礼［黒田 1988: 7章参照］を念頭に置いて行なわれている。このことは必ずしも組合員や支持者に好まれなかった。メキシコ人でもプロテスタントのエピファニオ・カマチョは行進の指揮者になるはずであったが、参加をやめた。ＡＦＬ―ＣＩＯからのＡＷＯＣへの連絡係のアル・グリーンは労働組合運動に宗教は合わないと考えた。公民権運動から出発してチャベスの活動に参加するようになったマーシャル・ガンズはユダヤ人であったため、行進のカトリック色に難色を示した［Altman 1996: 60, 68］。

しかし、大多数の組合員はメキシコ系のカトリック教徒であったため、これらの宗教的シンボルと儀礼の時は容

易に受け入れられた。

(4)アステカの鷲、サパタ、独立記念日

メキシコ国家に関連する表象や日付も運動の活性化と成功のために頻繁に採用された。

まずアステカの鷲がNFWAの旗印になった。チャベスは一九五九年、オクスナードで抗議の行進をしたときから組合の目印となる旗の必要性を感じていたが［Rodriguez 1991: 45］、一九六二年に実現の運びとなった。

一九六二年九月三〇日、NFWAの最初の大会がフレズノの老朽した劇場で開かれたとき、チャベスはその旗を披露した。白い円の中に黒でアステカの鷲が描かれ、白の円の外側は赤に塗られた旗である。参加者の反応は賛否両論であった。チャベスは「旗は希望を表す強く美しい印です」といい、支持者は「黒の鷲は労働者の暗い状況、白は希望、赤は労働組合員の闘争と犠牲を表している」と説明した［Rodriguez 1991: 54］。以降、この旗はデモ行進に、ブドウ不買運動に、組合集会に、その他あらゆる場で使われた。

旗の中心的シンボルにアステカの鷲が採用されたことから明らかなように、チャベスたちはアステカをメキシコを代表する文明とみなしており、メキシコが実はマヤ、サポテコ、ミシュテコをはじめとする多様な先住民社会と文化を含んでいる事実への配慮をしていない。これは一九六〇年代のチカノ運動にはじまり、現在に至るメキシコ系アメリカ人の志向である。アメリカ合衆国に住む周縁的な存在であるこの人々がその文化的アイデンティティを表すシンボルを探すとき、彼らは自分の出身国の周縁的な民族集団や地域を忘れ、支配的なナワ―アステカ―メキシコ国家のシンボルを選んでしまうのである。六〇年代末、アメリカ合衆国の南西部は元々はアストランという「アステカ揺籃の地」であり、メキシコ系の人々が戻って行って住む権利がある、という説がメキシコ系の人々の間で普及した。実際には、アステカ王国を形成した人々はメキシコ北西部から移住してきたと推測されているが、メキ

シコ系の論客たちはアストランをアメリカ合衆国の南西部に求めたかったのである［Chávez, J. 1984: 8］。アステカの人々がユト・アステカ語族に属し、この言語の発祥地はアリゾナ州付近と想定されていることに思いを託しているのである。チャベスと支持者たちも同じ流れのなかにあり、自分たちをアステカのシンボルによって統一できると考え、メキシコなるものを地理的に中央と北部メキシコを中心に考えていたようである。時代が下って、八〇―九〇年代に、メキシコ南部からも移民や不法入国者が増え、農業労働に従事するようになることを、この時点ではあまり予測していなかったのであろう。

メキシコ革命の英雄サパタや独立記念日もチャベスの運動の過程で重きを置かれた。一九六五年九月、ＡＷＯＣのフィリピン人労働者から協力を要請されたチャベスは決定をＮＦＷＡの集会にゆだねた。この集会の日付にチャベスはメキシコ独立記念日の九月一六日を選び、イダルゴの反乱への言及を演説文に入れ、人々を元気づけた。場所はデラーノにあるグアダルーペ教会のホールを選び、黒いアステカの組合旗を掲げ、スローガン、それに革命児エミリアノ・サパタの絵をはり、人々の志気を高め、組合員の賛成をかちとった［Altman 1996: 55, Falstein 1994: 34］。文献に明示されているのはこの一例であるが、サパタの絵は運動の他の過程でも使われたのではないかと、私は推測している。

(5) 音楽と物語詩（コリード）

歌が人々を動員するのに効果的であることをプロテスタントの礼拝に参加して学んだ、とチャベスはのべている。歌って手を打つことで参列者が元気になり幸せになるのを見物して、彼は最初の組合活動からこの手法をとり入れた［Herrera-Sobek 1993: 179］。

集会、行進にはギターやアコーディオンによる音楽が奏された［Broyles-González 1994: 1の写真］。

メキシコ系の歌手も運動を支援した。ジョーン・バエズは一九六六年のディジョルジョ農場へのブドウ・ストライキのとき、組合支援のためのコンサートを開き、その収益から二万ドルを組合に寄附した。さらに、一九七三年、アーヴィンにあるディジョルジョ農場にピケをはる際に組合員ファン・デ・ラ・クルスが銃で撃たれ死亡したとき、その葬式にバエスは参加した［Taylor 1975: 205, 311］。

メキシコの物語詩（コリード）も行進中、野営地、集会の場で読まれ、参加者の意気を高めた［Herrera-Sobek 1993: 180］。コリードとはスペインのロマンセロ（史詩）に起源のある物語詩であるが、これがメキシコ文化圏で流行したのは次の四つの時期であった。①一九世紀半ば、リオ・グランデ河下流域でアメリカ合衆国に対してメキシコ人の英雄が抵抗したとき、②メキシコでポルフィリオ・ディアス政権の専制政治に対してゲリラが頻発した頃（一八八〇―一九一〇）、③メキシコ革命時（一九一〇―一七）、④クリステロの反乱[7]の頃（一九二七―二九）であった［Herrera-Sobek 1993: xxii-xxiii］。つまり、社会の混乱期にコリードは流行し、社会正義を主人公の物語に託して歌いあげていた。そのコリードには一定の流れがあり、作者から公衆への呼びかけ、場所、日時、主人公の名、社会的状況への言及、主人公のメッセージ、主人公の別れ文句、詩作者の別れ文句で終わる［Herrera-Sobek 1993: xxiv］。このコリードは一九三〇年代から退潮気味であったが、チャベスの運動に伴ないコリードのルネッサンスが起こった。運動の進行過程で即興的に多くのコリードが生まれ、作者も不明なまま忘れ去られるものが多かった。そのなかで今に伝わる作品もあり［Herrera-Sobek 1993: 177–187］、当時のコリードの雰囲気をよく伝えている。紙幅の制限上、一つだけ選んで次に記してみよう。スペイン語の原文を付したのは、韻のふみ方や音の面白さを察知してほしいからである。

El Corrido de César Chávez

セサル・チャベスのコリード

En un día 7 de marzo
Jueves santo en la mañana
salió César de Delano
componiendo una campaña.

Componiendo una campaña
este va a ser un ejemplo
esta marcha la llevamos
hasta mero Sacramento.

Cuando llegamos a Fresno
Toda la gente gritaba
y que viva César Chávez
y la gente que llevaba.

Nos despedimos de Fresno
nos despedimos con fe
para llegar muy contentos
hasta el pueblo de Merced.

3月7日、
聖木曜日の朝、
セサルはデラーノを発ち、
運動をはじめた。

運動をはじめた、
これこそ模範になる、
私たちがつくるこの抗議の行進は、
サクラメントにまで至る。

フレズノに着いたとき、
皆が叫んだ、
セサル・チャベス　万歳、
付いていった人々にも　万歳。

フレズノに別れを告げ、
信念をもって別れを告げ、
おかげで無事に着く、
メルセドの町へ。

Ya vamos llegando a Stockton
ya mero la luz se fue
pero mi gente gritaba
sigan con bastante fe.

Cuando llegamos a Stockton
los mariachis nos cantaban
que viva César Chávez
y la Virgen que llevaba.

Contratistas y esquiroles
ésta va a ser una historia
ustedes van al infierno
y nosotros a la gloria.

Ese Señor César Chávez
él es un hombre cabal
quería verse cara a cara
con el gobernador Brown.

ストックトンも近くなると、
陽光は去った、
されど人々は叫ぶ、
たくさん信念をもてと。

ストックトンに着くと、
マリアッチが聞こえた、
セサル・チャベス　万歳、
グアダルーペの聖母　万歳。

請負人とスト破り、
新しい歴史がつくられているのだ、
君らは地獄へ、
私たちは天国へいく。

セサル・チャベス、
強い男、
面と向かって、
州知事ブラウンを相手にした。

Oiga Señor César Chávez　　あなたはセサル・チャベス、
su nombre que se pronuncia　　その名は知られ、
en su pecho usted merece　　その胸にふさわしい、
la Virgen de Guadalupe.　　グアダルーペの聖母。

［Herrera-Sobek 1993: 180］

（6）農民劇場

メキシコでは旅芸人の劇団はカルパ（テント）と称され、メキシコ北部やアメリカ合衆国南西部まで出かけて公演していた。このカルパの伝統から芽生えたのがルイス・バルデスの主催した農民劇場（テアトロ・カンペシーノ）である。バルデスはデラーノ出身者で、ブドウ・ストライキの頃はサンノゼにいたが、チャベスの運動に賛同し、一九六五年より劇作活動を通じて支援した［Kushner 1975: 140］。

農民劇場は英語とスペイン語のバイリンガルで劇を上演し、農業労働者を教育し組織するためのものであった、とバルデスは言っている。その試みは組合の事務所に使われていたデラーノの老朽した小屋ではじまった。そこである夜、バルデスが役者となる人の首に「スト破り」、「ストライキを打つ人」、「ボス」といった役割を示すサインを付け、各々に自発的に演じさせたのが事のはじまりだった。そこからスキット（寸劇）が生まれ、ユーモアや批判が表現された［Broylez-González 1994: 10–13, Valdez 1972: 359–361］。

こうしてはじまった農民劇場は一九六五年から二年間、組合活動を支援してアメリカの西部と南西部の各地で上演された。農場、キャンプ地、組合集会、組合ホール、大学、市民会館が上演の場であった。さらには、ニューヨーク州内の村々の劇場、ニューポート・フォーク・フェスティヴァル、ワシントンの上院の内庭でも上演する機会を

えた。一九六七年九月、バルデスが劇作の芸術的展開を求めて独自の活動をするためフレズノ近くの小村デル・レイに移るまで、彼の劇団活動は組合運動を支えた［Broylez-Gonzáles 1994: 10–13, Valdez 1972: 359–361］。

農民劇場についての研究書に載せられた写真［Broylez-Gonzáles 1994: 20, 23, 39の写真］から判断するに、上演は労働者に分かりやすい寓意劇のような形で進められている。一九六六年のデラーノからサクラメントへの二八〇マイル行進の折には、毎夕、トラックの荷台を劇場とし、名優フェリペ・カントゥーを含む三人の男性が「緑のブドウ」、「くさったブドウ」、「ブドウ」を演じ、即興劇を上演し、参加者を楽しませた。そして一九六七年の劇「五つ目の季節」では、「冬」と書かれたプラカードを付けた男性は希望のない労働者を表し、「春」のプラカードの女性は希望を表し、「春」が「冬」に闘うよう説得する。さらに同じ劇中、「ドン・コヨーテ」（腐敗した人夫請負人）のプラカードを付けたアグスティン・リラ（バルデスに次ぐ農民劇場の創立者）に対して「ドン・ソタコ」（荒削りな人物）のプラカードを持った名優フェリペ・カントゥーが対立する、といった具合である。

こうして、農民劇場は組合労働者の余興となり、その教育に貢献した。そして主催者のルイス・バルデスは農民劇場の限界を経験した結果、より自由な表現を求めて努力し、一九七八年にはロサンゼルスで「ズート・スーツの反乱」の上演に成功し、それが一九七九年にはニューヨークのブロードウェイでも上演された［Kanellos 1990: 178–179］。組合員のための農民劇場はチカノ芸術家バルデスの形成にも役立ったといえる。

(7)壁画

メキシコ系アメリカ人は母国メキシコに根づいた壁画の伝統を受け継ぎシケイロスが開拓した技法を学びとり、一九六〇—七〇年代には独特のチカノ壁画を生みだしたが、この民衆芸術活動はチャベスの運動とも関わりが深い。そもそも、チカノ壁画の第一号とされる作品は一九六八年制作のデル・レイ壁画であり、チャベスの運動を支援

した劇作家ルイス・バルデスに関わる場所に描かれた。すでにのべたように、バルデスは一九六七年に農民劇場の活動から離れ、サン・ホアキン・ヴァレーの小村デル・レイに移り、新しい劇作活動に入ったが、このデル・レイの文化センターの木造の建物の扉の横に描かれたのがデル・レイ壁画で、サパタ、チャベス、マーティン・ルーサー・キングなどの姿が描かれていた（第六章参照）。これは実に素朴な壁画であるが、これ以降、カリフォルニア各地にチャベスの組合活動を支援する壁画が描かれ、典型例としては一九七四年イースト・ロサンゼルスでカルロス・アルマラスと青年たちが制作した「ガーリョ農場のブドウを買わないで」などをあげることができる（第六章参照）。

壁画的描法が組合の集会場の装飾に利用されたことも明らかである。たとえば、一九七三年フレズノでのＵＦＷの大会では、会場の演台の背後の壁の左右に組合旗、中央の壁にはＵＦＷのシンボル「アステカの鷲」と「ウェルガ」（ストライキ）のプラカードを持った人物が描かれ、農場主、警官、ティームスターズに対する組合の闘いの歴史が描かれている［Taylor 1995: 318の写真］。文献の写真から判断するに、オイル・キャンバスのような画材に描かれた一種の移動用壁画（第六章参照）ではないだろうか。

以上、七項目に分けて、組合運動へのメキシコ系文化の援用についてのべてきたが、現実には、七つのことが入り交じりながら、オーケストラ効果をかもしつつ運動の参加者をつき動かしていったのである。第一節でみたように、チャベスの運動は基本的にはアメリカの市民社会に定着した労働組合運動の方法を採用しながら、その実践過程においては参加者の大多数を占めるメキシコ系の人々の民族（エスニック）文化を活用したのである。より正確には、「活用した」というより、運動の過程で、指導者と支援者の相互作用のなかからエスニック文化が「生み出されてきた」といえよう。そして、この文化の内容は、（1）―（7）に至るまで検討してみたように、メキシコそのものではな

くアメリカ合衆国へ越境した生活者メキシコ系アメリカ人のつくりだした文化、つまりはメキシコ系アメリカ人のエスニック文化である。これを人によってはチカノ文化と呼ぶが、それが創生されるまたとない機会を提供したこともセサル・チャベスの農業労働組合運動が高く評価される一つの理由といえよう。

三　現在の課題

一九九三年四月二二日、セサル・チャベスが死去した。翌年、家族と友人は財団を設立し、彼の組合活動の精神の継続をはかった。同年、アメリカ合衆国政府は「自由のメダル」をチャベスに授与することとなり、未亡人ヘレン・チャベスとアルトゥーロ・ロドリゲスが受けとった。彼はチャベス亡き後のUFWの代表であり、チャベスの娘婿でもある［González 1996: 116-117］。一九九三年ロドリゲスがUFWのリーダーとなって以来、組合はカリフォルニア州のサリーナスとサンタ・クルス近辺のマッシュルーム採集労働者、セントラル・ヴァレーのバラ（花）労働者、ワシントン州のワイン醸造労働者の組織化に成功してきた［*New York Times*, May 30, 1996］。そして、一九九六年五月には、サリーナス・ヴァレーのレタス労働者の要求を支援し一七年間続いた闘争に妥結をもたらした［*Economist*, June 8, 1996. *New York Times*, May 30, 1996］。さらに、ワトソンヴィル（サリーナス・ヴァレーの北）近辺の一万五〇〇〇人のイチゴ採集労働者を組織しはじめた［*New York Times*, July 3, 1996］。

しかし、組合活動は必ずしも順調とはいえない。一九七〇年代には七万を越えた組合員数は一九九六年には公称で二万五〇〇〇人となり、加入率が低い。そして、組合労働者の仕事を奪う不法入国者[8]や一時的就労ビザを有するメキシコ人やグアテマラなど中央アメリカからの人々も多数いる［*New York Times*, March 6, May 30, 1996, May 31, 1998］。

組合労働者、一時的就労ビザ保有者、不法入国労働者、いずれであれ農業労働者は貧しい。この人々の将来はどうなるのか。セサル・チャベスが運動をはじめてから三〇年余、問題は山積みである。

「付記」メキシコ系農業労働者と日系人の接触

セサル・チャベスについての文献を読んでいるうちに、日系人とメキシコ系の人々は過去にどのような関係を持っていたのか、ということに私は興味を持つようになった。これまでに入手しえた資料はわずかであるが、それらを参照しているうちに、両者が過去のいくつかの時点で現在より密接な関わりを持っていたことが分かってきた。

記録にある最初の接触は二〇世紀初頭に起こっている。一九〇二―三年、テキサス州のヒューストン商工会議所とニューヨークの日本総領事の支援をえて、若干数の日本人が資本を持ってテキサス南部に入り、稲作を試みた。このとき、黒人とともにメキシコ系の人々も雇われ、事業はスタートしたが成功を納めはしなかった。パイオニアの西原清東と岸吉松と幾人かの日系家族だけが一九二〇年まで稲作を続けたとされている［ホソカワ 1980: 89–90］。テキサス州南部にはメキシコ系人口が多いので、その労働力が利用されたのは事実であろうが、その折の日系人との接触の詳細は報告されていない。

二〇世紀初頭の両民族の人々の最大の出会いは一九〇三年、ロサンゼルス市近くのヴェントゥーラ郡オクスナードでのストライキの時に起こった。このとき、約二〇〇人のメキシコ系の人々と約五〇〇人の日系人の砂糖大根農場労働者が日本・メキシコ労働協会（ＪＭＬＡ）という組合を組織し、他の人々を含め総勢一二〇〇人でストを打ち、農場主と契約斡旋業者に対抗していった。組合の会長は馬場小三郎という人夫請負人であり、副会長は、ヘイゾー・オートモ（漢字不明）であった。日本人側の書記官はＹ・ヤマグチであり、サンフランシスコから募集され

た人であり、片山潜の社会主義思想に賛同していた。メキシコ系の人々を代表したのは書記官のJ・M・リサラスであり、この人も人夫請負人であった。リサラスは合衆国の大組合組織であるアメリカ労働総同盟（AFL）に対してJMLAへの特許を申請したが、成功しなかった。同総同盟の会長サミュエル・ゴンパーズは特許状を与える姿勢をとったが、アジア人（日本人と中国人）に成員権を与えることを拒否した。これに対して、リサラスは日系人が盟友であることを強調しゴンパーズに再考をうながしたが、AFLはその基本的方針を変えなかった。その結果、JMLAは一九〇六年頃には活動力を失ってしまった［Almaguer 1984, Gómes-Quiñones 1972, イチオカ 1992: 106–113, Takaki 1993: 187–189］。アジア系の人々に対する偏見と差別はメキシコ系の人々に対するより大きく、両者の共闘をさまたげたのである。

一九三〇年にはインペリアル・ヴァレーで、七〇〇〇人のメキシコ系、一〇〇〇人の日系、数百のフィリピン系の労働者が共闘した。このストライキには統一連盟に属する農業労働者産業別組合（AWIU—TUUL）が協力し、一〇人の組織者を派遣した。このなかにテツジ・ホリウチという日系人が含まれていた［Yoneda 1971: 154］。

一九三三年には、右にのべた農業労働者産業別組合（AWIU）の日系人の活動により、フレズノ、サン・ガブリエル・ヴァレーなどで二〇以上のストライキが打たれた。これらには五〇〇〇人の日系人、数万人のメキシコ系、フィリピン系、白人、黒人の労働者が参加したといわれる［Yoneda 1971: 154–155］。

一九三六年には、カリフォルニア州日系人農業労働者組合（CJAWU）の支援をうけて、メキシコ系、日系、フィリピン系のセロリ農場労働者がロサンゼルス近くのヴェニス（マリーナ・デル・レイの近く）でストライキを打ち、この動きは南カリフォルニアの農場にまで広がった［松本 1992: 55, Yoneda 1971: 155］。

一九三〇年代の大恐慌がすぎると、労働争議は減り、労働者は民族集団別の労働組合運動のわだちに戻った。そして、メキシコ系と日系人の共闘は実現しにくくなった。日系人の中産階級化もメキシコ系の人々との距離をつくっ

ていったと思われる。

そして、一九六〇年代に入ると、メキシコ系労働者はセサル・チャベスの率いる統一農業労働者組織委員会（UFWOC）に組織され、アグリ・ビジネスに対抗する時代となった。この組織の活動に日系人も入っている、とチャベスは発言しているが［Steiner 1970: 317］、現実には日系人労働者はスト破りの方に多く加わっていた。彼らは、組合に入らず定職のない悪条件で暮らしていたので、低賃金でも仕事につこうとしたのであった［Yoneda 1971: 157］。

一九七〇―八〇年代になると、メキシコ系アメリカ人、特にセサル・チャベスをリーダーとする農業労働組合運動は続いていったが、日系人との共闘は報告されてはいない。